

特別対談

少林寺拳法グループ総裁

宗 由貴

中華人民共和国
駐日本国特命全権大使

程 永華

多くの分野で日中の架け橋を



——出合い

程永華駐日大使（以後、程）：1977（昭和52）年ですから、ちょうど40年前ですね。

宗由貴少林寺拳法グループ総裁（以後、宗）：最初にお目にかかったとき、大使は20代？

程：そうです。大学を卒業して大使館に入った直後だと思います。あそこ、上司の陳抗参事官にお供して、初めて多度津の本部を訪問しました。当時、宗道臣先生が非常にお元気で、本部をご案内くださいました。そして、拳士の皆さんに対する講話、それから少林寺拳法の指導を拝見しました。

宗：技術をご覧になりました？

程：はい。覚えているのは、腕をこんなふうに捻ったりして（実際にやってみせる）。

宗：そうでしたか（笑）。

程：すごいなと思いました。いろいろ拝見しましたが、やはり宗道臣先生の中国に対する友好の情熱をつくづく感じました。

そういえば、総裁とは多度津のお宅でお会いしたんですね。

宗：広間ですね。確か一緒にお食事しながらお話をしました。母手作りの料理で。

程：そうです。お母様の手料理で。そして、お母様からお茶も入れていただきました。そのときの印象が未だに残っています。

宗：私は、大使に対して、すごく正しい日本語でお話をする方という印象が強く残っています。当時、私たちの世代は、話し言葉がめちゃくちゃだったんです。それでも、いろ

左端が通訳を務める若き日の程永華大使



んなところに父に連れていかれて、話をすることで緊張することはなかったんですけど、大使の正しい日本語を聞いて、緊張したのを覚えています。

程：宗道臣先生から総裁をご紹介いただいたとき、「うちの娘です。今、自分がいろいろと教え込んでいます。これから人間としてどうなっていくか……」なんていう話をされました。

宗：こんな人間になってしまった（笑）。

——変わったところ、変わらないところ

程：中日の人的交流が始まったころの数字を見ますと、1972年、国交正常化の際の数字が双方向で9,000人くらい。昨年在900万人近くになりました。貿易でも当時11億ドルが、今は3000億ドルになっています。

ただ、私個人の気持ちからすれば、まだ足りない。900万人といっても、中国の国民の数、日本の国民の数からいって、もっと増えていい。また、現在、いわゆる世論調査などを見ると、国民感情として、あまり好きじゃない、親しみを

感じない、という数字が多く出てきます。私は、例えば中国から日本に来た人、あるいは日本から中国に行った経験のある人、こういう人たちに限定して世論調査をすれば、また違う結果が出たと思います。結論として、もっとお互いにフェイス・トゥ・フェイスの交流を増やす。そうすれば、国民の理解をもっと深められると考えています。



宗：まさに、昨年の高校生、今年の大學生訪中国も、行く前は不安だったり、家族や周りから「どうして中国に行くの？」と言われてたりする。それはやはり、偏った部分だけの

報道で中国をイメージしているからです。ところが、そういう偏った印象を持っている人たちが、中国に行って一日二日でガラリと変わります。180度変わる。

程：完全に真反対に。

宗：いい意味で。私は、日本は自由でネットから何でも情報が取れる、だから何でも知っている、分かっていると思い込んでいるのがすごく怖いんです。だから訪中国の出發前に、高校生にも大学生にも言ったのは、「先入観念は日本に置いていってください。自分で見て触れて感じて、そこからスタートしてほしい」と。本当に真っ白な状態で感じられる、そういう交流をお互いに絶対にすべきだなと思うんです。そういう意味で、大使に高校生、大學生の訪中のチャンスをつくっていただいたのは、本当にありがたかったです。

程：私が大使になって7年半たちましたけれども、貿易とか経済的な人的交流は増えましたが、先ほど言いましたように、国民感情は未だギクシャクしている。また、両政府間の青年交流も、ここ数年減ってきていました。このままではまずいと考え、私たちの大使館でできるかぎりのことをしようと。そこで、高校生、大學生を中心に青年の交流を招請しようと企画しました。また今回は、たまたま北京大学の責任者と相談したら、交流の場として北京大学を提供してくれることになり、「中日大學生千人交流大会」が実現したんです。

宗：私たちのような民間団体は、文化交流ですから、こういう交流をしていったらいいのかなと、いつも考えながらやってきました。で、70年代は、少林寺拳法でいうと、演武を披露する、そして中国武術の表演を見せていただく、お互いに見るということで終わっていました。だから実際には交流まで行っていない、入り口だったと思います。80年代に入って、81年から、たまたま河南省とご縁ができていた

ので、先に河南省をメインとして、その後北京から、日本語研修のための留學生の受け入れを始めました。その後も、河南省登封市に嵩山少林寺と共同で建てた少林希望小学校の生徒を日本に招待したり、少林寺拳法からもさまざまな訪中を行いました。それがまた今、変化してきている。

ただ、変化してきたものと、変わらず守ってきたものがあります。父が残した言葉の「日中の友好なくしてアジアの平和はありえず、アジアの平和なくして世界の平和はありえない」という、これは変わりません。

程：宗道臣先生の言葉には、私も強く心を打たれました。また、人に言いたくなる言葉でもあります。しかも、70年代にこういうお話をされたというのは、すごく先見性のある、力強いメッセージだと思います。このロジックは、日本と中国の両国が、仲よくお互いに友好交流して、平和を守るという意味だと思います。今日においても、非常に現実的な意義のある言葉だと思います。

宗：父の実感がこもっている言葉だと思います。父は心臓が悪くて兵士にはなりませんでしたが、それでもあの戦争という時代を経験している。そこで得た結論というのは、「正義の戦争はない」というものでした。そして、「自分がされて嫌なことは、どこの国の誰だって嫌なんだよ。何にも難しくない、当たり前のことなんだ」って。

程：かつての戦争という不幸な時期、当時、中国側としては、日本に対する責任追及という意味においては、日本の軍国主義者と一般兵士、日本大衆を分けて考えていました。これは戦争中、また戦争終結直後もそういう政策をとっていました。で、第二次世界大戦終結後、中国国内で内戦が起きました。その内戦の最中においても、共産党と国民党が協力して、東北部から、確か日本の残留民105万人を送還しました。ですから、そんな経験をお持ちの方は、戦争は二度とあってはならない、起こしてはならない、ということを、身にしみて痛感しているんです。だから、どんなに時代が変わっても、友好交流活動が続けているんですね。

まあ、私自身は総裁と同世代ですから（笑）、直接は戦争を知りません。でも、中国の東北部の出身ですから、身近にいろんな戦争の跡が残っていました。炭鉱の跡とか。

宗：万人坑ですね。

程：あの万人坑、人間が機械代わりになって強制労働をさせられた。そして、怪我や病気をしたら、捨てられた。もう人間扱いじゃない。そういう跡

